

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3373100258		
法人名	株式会社 コステム		
事業所名	グループホーム あしたちの家(明日香ユニット・英賀ユニット共通)		
所在地	〒716-1401 岡山県真庭市五名80番地		
自己評価作成日	平成30年1月22日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_2017_022_kani=true&JigyosyoCd=3373100258-008&PrefCd=33&Versi
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフサポート		
所在地	岡山県岡山市北区南方2丁目13-1 県総合福祉・ボランティア・NPO会館		
訪問調査日	平成30年2月5日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

昔ながらの木造建築で、周囲は田畑に囲まれ、自然環境に恵まれた地に位置し、地域の方と気軽に交流できる開かれた施設、地域福祉の拠点のひとつとして地域に根づいた施設となってきた。併設の小規模多機能事業所と共同で、家族会、花見、クリスマス会、敬老会等を、利用者・家族・運営推進委員会の方・地域ボランティアの方々と交流を大切に考え実施しています。ボランティアや地域の方の訪問も、中学生から幅広い年齢層の方の来所も増えています。利用者の方が住み慣れた地域・風土の中で安心して生活でき、利用者の方の有する能力を生かしての毎日の生活・その人らしさを大切にしたい生活を支援します。職員も介護のレベルアップを目指し、資格取得や研修の参加に努めています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「あしあたりとは？」と尋ねると「岡山の方言です。明日も続く楽しい居場所です」と教えてくれた。その通り、ここは本当に自由で気まま。多少の無理にも職員は目を瞑る。利用者の「なにがなんでも、こうしたい！」の意欲に職員はハラハラしながらも応援している。こんなホームが楽しくないはずは無い。しかも職員は利用者も道連れにしながら自らの暮らしを楽しんでいる風を感じる。以前から思い付いたら演劇に一生懸命になるし、今日も「節分祭」で利用者のベテラン主婦を中心に巻寿司作りや、出雲大社から神主さん達が登場する？等、その凝り方は半端ではない。この空気は利用者にもよく伝わり、それぞれの人が自分の個性をしっかりと表現している。活き活きとしている。「年を取ったからとか、認知症があるからとって、それがどうした？」と言っているような「GHあしたちの家」である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念 kyongi					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	・理念は玄関と各ユニットに掲示し意識しながら日頃の支援に生かすように心がけている。また、定例の職員会議等で社長以下、職員全員で理念を確認し意識を共有している。	今年の目標は「接遇」。現任・新任の全職員が電話の掛け方や来客の接し方・対応等、きちんとした接遇について初心に立ち返り、今一度見直しを図ろうと目標達成計画にも掲げて、職員間で話し合いながら実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	・ボランティアを積極的に受け入れ、来所者は毎年増え利用者や職員との交流ができています。 ・地域のイベントに利用者と共に参加し交流している。	夏には休耕田に種を蒔いた向日葵の花が咲き、チラシで宣伝をして地域の人に一般公開をした。大勢の見物客も訪れ地域交流の一環として今後の定着も期待できる。若い職員が地域を巻き込んで、グループホームの枠を超えて交流した結果、以前にも増して地域に認識されてきた。	真庭市では2番目の老舗のグループホームでもあり、地域との交流や貢献はこの地にはなくてはならない存在となっている。今後、今以上に山間地域ではこの様な施設が住民の生活の要になるに違いない。地域のリーダーとして頑張ってください。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	・認知症キャラバンメイトへ登録し地域に向き、サポーター養成講座や勉強会で理解や支援の方法の啓発活動に貢献している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	・年6回開催し、意義深い内容になっている。打ち解けた雰囲気でも協議も充実してきている。 ・会議での内容や意見、助言を大切に考え、職員会議で職員に周知し、サービス向上に取り組んでいる。	隣接する小規模多機能ホームと合同で開催し、参加メンバーのホームの協力医に合わせて水曜日に行っている。市の担当者、家族、協力医、地域のボランティア、キャラバンメイト等の参加の下、「運転免許の新制度について」等、有意義な情報交換や意見交換をしている。	ホームの運営やケアについて、この会議で相談したい問題点を職員サイドから今以上に取り上げて話し合いにつなげば、次のステップに向けた取り組みで出来ると思う。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	・運営推進会議、市内のグループホーム連絡会、地域ケア会議等連絡や協議ができています。また、必要時はその都度連絡し、相談にて連携をとっている。	運営推進会議に市の担当者の参加があり、情報提供を受けたり、意見交換をしている。管理者が利用者の市民後見人をしているので、介護保険制度が変わる時のタイミング等で、市へ相談に行ったり、担当課へその都度聞く等、日頃から密に連絡を取り合っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	・身体拘束についての書籍を読み理解できている。各ユニット会でも勉強している。 ・拘束が必要時は、文書で家族の同意を得て期間を決めて行う	現在入院している人の場合には、家族の了解を得て止むを得ず「つなぎ服」を使用したケースもあったが、拘束をしないケアを職員もよく理解しており、家に帰りたい人、外に出たい人等には、散歩やドライブをしたり一緒に話をして気分転換をしてもらう等、職員がしっかり寄り添っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	・高齢者虐待防止ガイドラインを参考にし、虐待防止の意識を共有している。職員会議で全職員で勉強会を行っている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	・「NPOこうけん」の会員に属し、会議や勉強会に参加している。後見業務を担当した職員もいる。・日常生活自立支援事業を利用の利用者があり、関係機関との相談、連携もできている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	・契約時は時間にゆとりを持って十分な説明を心がけている。改定等のときは分かりやすく表記し説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	・ご家族の面会時に意見や要望等をお聞きできる機会とし、利用者の声も聞いていただき、それらは月1回のユニット会議、職員会議で周知し反映している。運営推進会議でも報告している。	年4回「あしたり通信」を発行し、イベントや日常生活の様子を家族にお伝えする他、面会時には状況報告をしたり、家族としっかり話し合っている。花見・運動会・文化祭の時には、家族の参加も多く、親睦・交流を図り後日アンケートで感想や意見・要望を聞いている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	・月1回各ユニット会議、職員会議を全職員の意見や提案を聞く機会とし運営に反映している。	勤続年数の長い職員、年数も浅く若い職員がバランスよく配置されており、男性職員が半数を占める。ベテランの経験や若い人のアイデアが相乗効果を発揮し活気のあるホームになっている。年2回の個人面談をして職員の意見・要望を吸い上げ運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	・職員の努力・実績・資格等各種手当を付加し給料に反映している。職場環境作りとしてストレスを溜めないように労働時間や福祉用具の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	・資格取得に向けた支援(休日付加・合格後の祝い金)や多種類の社内・社外研修会への参加を積極的に支援を行っている。(参加者の勤務配慮や時間調整)		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	・近隣同業者との職員交流研修を行っている。市のグループホーム連絡会に加入し交流の場になっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	・入所前にしっかり情報収集し、本人像を把握する。 ・入所後は本人を丸ごと受け入れ、寄り添い傾聴し、安心出来る生活の場として受け入れていただけるように、余裕のあるケアで関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	・十分に情報をいただき、家族の思いをしっかりと聞く。その上で優先するケアを相談し確認する事で安心していただく。 ・いつでも気軽に相談していただける関係作りを伝えて思いを共有し協力も得る。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	・これまでのサービス利用の経緯や家族の思いを聴いた上で、優先するケアを相談し確認する事で必要なサービス提供へとつなげていくように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	・利用者の能力を勘案し、自立と自律を支援する。 ・人生の先輩として敬い、能力や知恵を借りることで生活を共にしている思いを感じ共有していく。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	・家族の面会の機会を大切に。お互いの情報を交換し、共有する。 ・必要時家族と連絡を取り合って情報を伝える ・写真入りの特別号も発行して家族に届けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	・ボランティアをはじめ来所の方が馴染みの方であれば、会話等の機会を設定している。 ・地域の方に援助していただき、在宅で生活していた時の馴染みの方の訪問をお願いする	自宅がホームの近くにあり、毎週末に外泊して家族との絆を深めている人もいれば、家族や友人がよく面会に来てくれる人もいる。気の合う人同士で声を掛け合い居室に集まり談話をしている人達にとっては、ここでの暮らしや仲間が馴染みの関係になっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	・利用者の性格や相性を把握し、良い関係作りに努めている。 ・利用者同士の声かけや誘導を薦め支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	・退所時にはいつでも相談や支援に協力できる用意があることを家族に伝えている。 ・他施設等に移られる祭には、きちんと情報を伝え、安心できる次のケアにつなげている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	・一人ひとりの声に耳を傾け、受容した上で適切な支援に努めている。 ・趣味や習い事も地域の方の協力もあり、できる限り支援している。 ・困難なときは利用者の行動にあわせている。	自室で絵を創作中の人は「私、習字も得意よ」と言いながら机に向かい半紙に得意の絵を描いている。個展を開くほどの腕前であり、職員の送迎で地域にある教室にも通っている。こんな生活が出来るホームはそう多くはない。ここでは出来る限り本人の望む生活を支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	・入所時をはじめ継続して家族等・関係機関からの情報収集に努めている。 ・利用者本人からも通常の会話のなかから聞き取り確認している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	・職員は一人ひとりを把握し情報を共有し、利用者の能力を活かすように努めている。 ・レク等の参加に声かけ、誘導の祭は本人の意思も確認する。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	・毎月のユニット会で課題提供やケア内容の検討をし、計画作成や見直しを行っている。 ・本人からの意向を確認している。家族にはできる限り面談で意向を伺うようにしている。	利用者の担当制があり、「利用者の状況シート」等を基に職員間でカンファレンスを行ない、定期的にモニタリングをして現状に即したケアプランを作成している。「どう暮らしたいか、どう過ごしたいか」という本人の思いを尊重し、支援の方向を皆で検討し、心のケアを重視している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	・日々の記録は利用者の生活の様子が分かりやすい記入に努め、各職員が目を通してしている。 ・日々の個人記録とは別に気づき、連絡ノートを用意し情報を共有しケアの役に立っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	・本人、家族の状況に応じて受診、外出の援助をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	・運営推進会議では地域の情報や、支援に関する情報をいただき、サービス向上に努めている。 ・ボランティアの定期訪問も定着している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	・本人や家族の希望するかかりつけ医に定期受診をしている。職員が通院支援をしている。往診も毎週1回来てくれる。 ・運営推進会議にかかりつけ医が出席してくださり、安心できる連携ができています。	ホームの協力医をかかりつけ医としている人が多いが、本人・家族の希望するかかりつけ医を受診する人もいる。希望があれば訪問歯科も可能だが現在、利用している人はいない。協力医の週1回の往診があり、いつでも気軽に相談・対応してもらえるので安心でき、管理者(看護師)の存在も心強い。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	・看護師が常勤で勤務しており、介護職員は随時相談ができています。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	・近距離にある協力病院があり、相談をし紹介入院できる。面会もでき、病院の職員とも連携をとり必要時はカンファレンスをし、情報交換をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	・本人や家族の意向を伺いながら、医師や職員が連携を取っている。 ・家族に終末期の「看取り」に関する意向確認書をいただき、必要時は再確認をさせていただく。希望があれば、ホームでの看取りもさせていただく。	各ユニットで1名づつ、2名の看取りを行なったが、管理者が看護師であり、過去に何例か経験のあるユニットに比べ、今回初めて看取りを実施したユニットでは、終末期ケアに不慣れな職員も多く、反省点を話し合い課題を発見して次回につなげる貴重な経験となった。出来る限り本人・家族の希望に添うように努めている。	家族にはもちろんの事、利用者本人にも終末期の有り方の希望を早い段階で聞いておこうという支援をしている。その時期や方法を、一人ひとりに見合った工夫を職員間で話し合い、実践して欲しい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	・消防署の救急救命士から救急法の指導していただき、職員全員が受講している。今後も継続し受講を考えている。 ・職員間の緊急連絡網は整備している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	・消防署立会い指導のもとに年2回(春・秋)の避難訓練を実施している。夜間を想定した訓練や地震、水害等の災害時に備えた訓練も実施している。近隣、地元消防団との協力体制を整えていきたい。	今回は大雨警報により避難勧告が出たという想定で、近くの小学校まで避難する訓練をして、利用者全員参加して車で避難したが、交通量も少なくスムーズに行けた。避難訓練終了後に実施した運営推進会議で反省会と意見交換を行なった。防災フローチャート(水害)も備えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	<ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりを理解し、尊重した対応に努めている。 慣れてくると言葉遣いが馴れ合いになりやすいので気をつけている。 	<p>近くの授産施設まで毎日、車椅子を自走して散歩に行く人、敷地内を気の合う仲間と自由に散歩する人達等、それぞれの意向を尊重しており利用者の自由度が高い。男性職員が多いので、利用者からの希望があれば同性介助で対応する等、羞恥心にも配慮している。</p>	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	<ul style="list-style-type: none"> 声をかけて本人の意思を確認している。 状況によっては、一人ひとりに個別に確認をしている。 		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	<ul style="list-style-type: none"> 家庭的な環境を大切にして、その人らしく生活をしていただいている。 居室に閉じこもりにならないように声かけをし誘導もしている。 		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	<ul style="list-style-type: none"> 2ヶ月に1回近所の理髪店に来ていただき散髪をしている。 季節ごとに衣類を整理し、気候に合った着衣が出来るように支援している。家族の方に連絡をして持参してもらう。 		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	<ul style="list-style-type: none"> 職員も一緒に食事をして、会話の中で好みなどを聞いている。野菜の下ごしらえや盛り付け、下膳を手伝ってもらっている。 	<p>今日は「節分祭」のイベントがあり、昼食は巻き寿司。両ユニット一緒に、日本手拭いを姉さんかぶりにして割烹着を身に着け、手慣れた手つきでお手伝いをしたり寿司を巻いていく利用者達。職員との声の掛け合いも賑やかに楽しい食事風景だった。</p>	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	<ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりの水分、食事量、排泄量をチェックして、体調と摂取量を把握し、適切な支援に努めている。 		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	<ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりの状態に合わせて口腔ケアを行っている。 		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	・排泄チェック表で排泄リズムを管理し、適切に声かけや誘導をしている。トイレでの排泄を心がけて、トイレに座位となってもらう。失敗やおむつの使用については、職員間で検討しながら適切な支援に努めている。	各居室にトイレがあり、寝たきりの人も排泄はトイレに座ってする事を基本にしており、その人の状態によっては、トイレの戸を取り払う等の工夫をしている。排泄が自立で布パンツの人も半数近くいて、家庭用コールを設置した結果、リハビリパンツから布パンツに改善した例もある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	・排便間隔をチェックし、水分摂取量の管理、運動のすすめ等で自然排便試みる。また、自然排便なければ下剤でコントロールをする事もある。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	・2日に1回の入浴を基準に行っている。特に希望があれば、毎日でも受け入れ支援している。時間は定着しているが順番は希望にあわせることができる。	シャワー浴と足浴の人1名以外は、全員浴槽に浸かって入浴出来ている。入浴拒否の強い人に対して、職員はいろいろ工夫をし試行錯誤をして苦勞を重ねた結果、今では夜間帯(夕食後)に入るという事で入浴が出来るようになった人もいる。毎年、冬至の日は柚子湯、子供の日は菖蒲湯をして喜ばれている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	・一人ひとりの生活習慣を尊重している。午睡は昼夜逆転にならない程度にと、気をつけてもらっている。時間を見て夜更かしをしないように声をかけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	・利用者毎のファイルを作り、職員全員が分かるようにしている。処方変更時は連絡ノートに記載し確認している。症状変化時は医師や看護師に連絡して相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	・生活歴や能力、好きなことについて情報を得て、職員と共にその方に合った仕事や楽しみごとに取り組んでいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	・外出行事、不穏時の散歩、買い物、散歩、ドライブ等の支援をしている。家族の来訪時も外出をされる事もある。地域の行事は楽しみにされるので、できるだけ出かけるようにしている。	入浴のない日曜日は外出する日にしており、「今日はどこに行く?」と利用者に希望を聞き、ドライブや散歩に出かけ、大変喜ばれている。春と秋には「お大師巡り」、お寺での甘茶祭り、中津井ひな祭り等、地域の行事にも出かけたり、希望者と外食に行く、家族と一緒に外食・外泊などの個別外出の支援もしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	・家族等と相談をし、小額を保持して安心している方もある。本人、家族と相談の上、ホームで管理している方もある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	・申し出があれば電話をして直接会話してもらっている。手紙等は職員の通勤時に投函の支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	・家庭的なつくりなので落ち着ける雰囲気が出ている。間接照明で柔らかい照明を配慮している。温度計・湿度計を設置し、毎日測定をして屋内環境を整えている。	両ユニットでリビングの趣きが異なるが、壁の作品コーナーには、塗り絵、絵手紙、花のスケッチ(絵画)等の利用者の作品や写真等が展示され、畳のコーナーでは炬燵で寛げる。広いリビングでは季節毎のイベント行事やレクリエーション等で盛り上がり活気溢れる空間になっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	・利用者の人間関係を考慮しながら、座る位置や食事の位置を配慮している。共用の畳の場所は自由に利用できる場所となっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	・居室の調度品や私物は本人の気に入った物を調達していただき、持ち込み自由になっている。	まるで書斎かアトリエのような居室で、好きな絵を描いて自由気ままに暮らしている人の部屋にお邪魔した。冷蔵庫を持ち込んでいる人からは、お菓子を振る舞われる等、まるで我が家にいるような生活がここでは実現出来ている。それぞれ居心地のよい落ち着いた部屋になっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	・建物内部はバリアフリーであり、ユニット間も自由に行き来出来るようになっている。利用者間で支えあう場面もみられる。個々の能力を勘案して自立支援の配慮をしている。		